

# 時の止まった赤ん坊

(下)

曾野綾子



毎日新聞社

# はった赤ん坊

(下)

曾野綾子



毎日新聞社

時<sup>とき</sup>の止<sup>と</sup>まった赤<sup>あか</sup>ん坊<sup>ぼう</sup> (下)

定価 一〇〇〇円

昭和五十九年十一月二十五日 印刷  
昭和五十九年十二月十日 発行

著 者 曾野綾子

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 大日本印刷  
製本 大日製本

目 次

第十四章      コスモスの村      5

第十五章      母なる川のほとり      35

第十六章      七時間の生涯      71

第十七章      濃密な時の流れ      108

第十八章      地の子供たち      150

第十九章      夕映えの岡      188

第二十章      「何故、人間の命は」      234

第二十一章      雨の聖母      284

あとがき      309

装画·插画

A  
D

三芳悌吉  
長峰八州男

時の止まった赤ん坊  
(下)



## 第十四章 コスモスの村

このアンツイラベの付近で、唯一信頼のおける「輸送会社」といえばフレール・ミシエルの日本製のランドクルーザー型の車だけだったが、この車が次の週の終わりにには、マハイザという村へさまざまな目的を持って行くことになっていることだけは茜も知らないではなかった。

第一の目的は、マハイザの村で職業教育を受けていた七人の娘たちを引き取りに行くことである。

この計画は「貧民係」のスール・バスカリヌがやっていることで、このあたりでは秀才でやる気もあるということになっている娘たち何人かを、マハイザという村に集めて三週間ほど合宿させ、その間に簡単な洋裁や編物を教えるというプロジェクトである。なぜ、マハイザまで行くかというと、その教会にフレール・ミシエルの兄のジャン・バプティスト神父が主任司祭としている上に、聖堂のすぐ脇に、何にでも使えるちよつとした宿泊設備があるので、そこに娘たちを泊められたからである。

フレール・ミシエルの車は、この教会学校とでも言うべき職業指導の企画に生徒たちを送り込み迎えるに行くという仕事から、ジャン・バプティスト神父に、新聞や食料品を届けるということまで、たくさん目的を持って三週間に一度ずつマハイザへ行くのであった。

マハイザはアンツイラベから僅か二十五キロしか離れていない村だというが、茜はまだ行ったことがない。フレール・ミシエルの活躍がなければ、こういう活動総てができないということは分かっていたが、茜は土曜の朝、フレール・ミシエルのうかない顔を修道院の台所の外で見掛けるまでは、マハイザ



行きはあくまでスール・バスカリーヌの仕事だと思って気にもとめないでいたのであった。

フレール・ミシエルは憂鬱そうな表情で院長のスール・ルイズと立ち話をしていたので、茜は初め、二人を避けるようにしていたのだが、フレール・ミシエルが、

「スール・アンヌ、お早う」

と声をかけてくれたので、初めて、

「お早うございます、フレール・ミシエル」

と挨拶したのだった。

「フレール・ミシエルの車がまた壊れたんですって」

院長のスール・ルイズが茜に言った。

茜はフランス人風に舌打ちしてみせ、

「困りましたね。迎えに行けなくて……どうします？」

と尋ねた。

「ボロ車だからね。いつも必要な時に怠けるんだよ」

「直ります？」

「これからやってみるけど、とにかく九時に出発ということは無理だと言いに来たんですよ」

それから一、二時間して、娘たちのうちの一人が、

「スール・アンヌ。スールの日本人のお友達が来てます」

と呼びに来た時、茜は午前中の定期検診の妊婦たちをほぼ見終わったところだった。

小木曾<sup>かぎぞう</sup>の車のところへ行くまで、それでも十分近くは待たせたので、茜はもう彼が帰ってしまったのではないかとも思ったが、手を洗ったり、うっかりその辺に放置しておいたらあつという間になくなってしまうような「貴重品」を片づけたりしていると、どうしてもそれくらいの時間はかかってしまうの

だった。

そうだ、小木曾には、タナナリブからここまでの電話代のお礼を言わなければいけなかった、と茜は思いだした。例の「カトリック救援同盟」に来ていたはずの品物の行方について、「イエズスの小さき姉妹会」のスール・内田篤子うちだあつこが小木曾のオフィスからかけてくれた長距離電話の電話代である。

車のそばには彼の運転手がいたが、小木曾の姿は見当たらなかった。彼は車内で本を読んでいた。

「どうも、今日は。お待たせ致しまして」

茜は車の中を覗きこむようにして言った。

「もう仕事は済んだんですか」

「はい、今日は土曜日ですからお午ひるまでです。先日はスール・内田がありがとうございます」

「いや、お役に立てなかったそうで……残念でしたね」

小木曾はその言葉をむしろ楽しそうに言った。

「今日はこれから、何か、用事がありますか」

「いいえ、急患さえなければ」

「そうだ、また同じことを訊いて、同じ返事をもらってしまった」

小木曾は笑ってから、

「これから食事に行きませんか」

と茜を誘った。

その瞬間であった。茜は頭に一つの計画が閃いたような気がした。

「小木曾さんは今日、明日はこちらですか？」

「そうです」

「実はお願いがありますの」

「なんです？」

「車を貸して頂けないでしょうか」

厚かましいとは思ったが、もう言葉が先に口をでいたので仕方がないという感じだった。

「車が何にいますか？」

「フレール・ミシエルという方の自動車はまだ動かなくなっているんです」

茜はマハイザへの補給・輸送便が切れそうになっていることを話した。

「マハイザっていうところは、距離にしてどれくらいあるんです？」

「二十五キロですって。そのうち舗装は七キロだそうですけど」

「運転手は、休ませてやった方がいいと思うけど、車はいいですよ。僕が運転するから」

「でもマハイザへ行ったら日帰りはできませんのよ。小木曾さんのお休みが一日つぶれるわ」

「かまいませんよ。アンツイラベでほんとうに何一つすることがないんですから」

茜は小木曾が、嘘をついたり相手に迎合したりする人ではないということが分かっていった。週末をマリーのところで過ごすことにして来たのだろうが、実は彼はこの国で死ぬほど退屈して変化を求めているようにも思えた。

「でも、マハイザまで車を出してくださいさるなんて、ほんとにそんな厚かましいことお願いしてよろしいのかしら」

「かまいませんよ。それで、どうします？ とにかく中国料理屋へ飯食いに行きませんか？ その後ででもいいんでしょう？」

「私、そんなことしていたらフレール・ミシエルに連絡とれませんか。お食事はいらしてください。私、その間にフレール・ミシエルを捕まえて、マハイザへ行けることになりましたよ、と伝えて、積むものの準備なんかしてもらおうようにしておきますから」

「じゃあ、どうぞ。僕はいずれにせよ、二時ころ、ここへ来ましょう」

茜は小木曾と別れると、大急ぎで食堂に行った。そこで院長のスール・ルイーズも他の人々もいたのだ、茜は、

「私のお友達のムツシュ・小木曾が車を出してくださいますって」と大きな声で言った。

「まあ、ご親切ね」

「よかったわ。マハイザの神父さまもこれで安心ね」

スールたちは無邪気な声をあげたが、院長のスール・ルイーズは茜を呼んで尋ねた。

「あなたのお友達の……ムツシュ……」

「ムツシュ・小木曾」

「その方はマハイザへ一緒に行ってくださいるの？」

「運転手さんには休みを取らせて、自分が運転して行くとおっしゃってますが」

「とすると、マハイザで一泊してくださいされるわけね」

「そのつもりようですけど、泊まる所があります？」

「司祭館はわりと広いのよ。だけどムツシュ・オギッスは……」

「小木曾です」

「ムツシュ・小木曾はフランス語をお話しになる？」

「少しはお分かりになるでしょうけど、マダガスカルは一時的な任地なんです。ですから、英語が得意でフランス語はほとんどお話しになりません」

「マハイザへ行って頂くなら、あなたも一緒に行ったほうがいいわ」

「でも、私は仕事がありますから」

茜はその時、自分の傍に影が近付いて来るような気がした。それはスール・ジャンだった。

「スール・アンヌ、あなたは行くべきだわ」

「私もそう思う」

院長が同調した。

「それだけのことをしてくださるのなら、あなたが行って不自由ないように見てあげるべきだわ。そうでなければ、ムッシューはお食事の時でも、ひとり話し相手もなく、ぼんやりしていらつしやることになるでしょう」

院長のスール・ルイズはすぐに作男のホセに、自分の自転車を貸して、フレール・ミシエルに幸便ができたことを知らせに行かせた。

「スール・ジャン。本当に、私がマハイザへ行ってしまうても大丈夫？」

茜はまだためらっていた。

「あなた、私はこう見えても、助産婦をもう十年近くもしてるのよ」

スール・ジャンは威張ってみせた。

「あなたなんか当てにしていると思ってたの？」

「まあ、なんて言い方！」

茜は笑った。

「私はもうマハイザから帰って来るのはよそう」

「お願いだから帰って来てね。あなたも知ってるでしょう。今お腹に双生児が入っている人が二人もいるんだから。あの二人が、もし同時にお産になったら、私はどうにもならないでしょう」

日本なら双生児かどうかは、機械的にいくらでも検査する方法があるのだが、マダガスカルではまだ、胎児の心音が二つ聞こえるということで判断しているのだった。

「それに、あなた、こういう機会にマハイザに行った方がいいわ。あなたはマダガスカルほんとうの田舎をまだ知らないんだから」

スール・ジャンが言った。

「そうね」

茜はどこも知らないと言ってよかった。修道女は、観光旅行をしにこの国に来たのではない。どの国でも同じことなのだが、任地に着いて、翌日から集中的な語学教育が始まり、それが三月なり半年なりで済むと、すぐ勤務である。実は茜は、首都のタナナリブの市内観光さえしたことがなかった。

「スール・アンヌ、すぐあなたも支度をなさいよ」

院長が言った。

支度といつても何もなかった。寝間着に洗面具、それにエプロンくらいなものである。ただ、茜はふと思いついて、いつか小木曾から届けられて来たまま、手をつけていなかった六枚のチョコレートのみを荷物の間に入れた。

小木曾は約束より十分ほど遅れてきたが、フランス人らしいやや大袈裟な感謝の表現をする院長や、控え目なスール・ジャンや、重々しい笑顔の会計のスール・ベルナデットなどの「盛大な」見送りを受けることになってしまったことを恥じているように、ただ皆と握手して笑っているだけだった。スール・アンジェリーヌまで遠くの物干し用の紐の下から茜たちを見送って手を振っていた。

「スール・パスカリーヌ、職業訓練を受けていた娘さんたちって、何人でしたっけ」

茜は同行するスール・パスカリーヌに尋ねた。

「七人よ」

「大丈夫かしら。これでフレール・ミシエルが乗られて、行きは四人だからいいけど、帰りは大変ね」

「平気よ。一番後ろの縦の席に、充分乗れるわ。それに一人は近くの村の人だから乗るのは六人だと思

うわ」

フレール・ミシエルの住んでいる修道院は「クララ会」の修道院に行く途中の淋しい岡の上にあったが、くずれかけた土塀に囲まれた中庭に、聖母像が立っているのが見えなければ、そこが修道院などとは誰にも分かりそうになかった。

「ありがとう、助かったよ。私はこの日本の車と結婚したんだ。毎日ご機嫌とって宥<sup>なぐさ</sup>めたりすかししたりしてるけど、なかなかうまく動いてくれないんでね」

「お分かりになりました？」

茜は笑いながら、小木曾に言った。

「偶然分かりましたね。だけど、修道士さんに言ってやってくださいよ。結婚よりは、どんなにボロでも、自動車のお守りをするほうがずっと楽でしょうって」

茜がその通り通訳すると、フレール・ミシエルは「オーケー、オーケー」と笑いながら早速薄汚い箱や包みを詰め込み始めたが、それを手伝っているのは瘦せて貧相な体格をした、まだ若いマダガスカル人の裸足の男だった。

「フレール・ヨセフです。知ってますか」

「いいえ、お見掛けしたことはありませんが、ご挨拶したことはありません」

茜はその裸足の修道士と握手し、小木曾にも紹介した。

「ほほう、この人も修道士さん？」

フレール・ミシエルは周囲のことなど何一つ気にしていなかった。

「運転は私がしよう」

フレール・ミシエルは言った。

「僕がしても大丈夫ですよ。そのために来たんだから」

小木曾は察して日本語で言ったが、フレール・ミシエルは、

「道が悪いからね。私のほうが馴れていると思うよ」

と運転席に座ってしまった。

「ムッシュ・小木曾が私の隣だ。それから、ヨセフとスールたちは後ろの席に乘せてもらいなさい。スールたちは細いから」

茜は呆氣にとられながら、黙って見ていた。フレール・ヨセフも一緒に来るなどとは考えてもいなかったのである。もともと六人の娘たちが乗れるかどうか心配していたくらいだから、さらにフレール・ヨセフが加わったらどうなるのか分からない。

しかし、スール・パスカリーヌもフレール・ヨセフと笑って喋っているところを見ると、誰もが何とかなるという計算なのだろう。自動車の定員などというものはほとんど頭の中になく、日本人のほうが拘子<sup>しやうし</sup>定規で、考え方がおかしいのである。

ドライブは素晴らしい景色で始まった。それは、どこにでもある田園風景だったが、茜はいつ見ても心が慰められた。子豚に紐をつけて散歩させている村の男がいる。車が急に速度を落としたのは、家鴨<sup>あひる</sup>の子供たちが、十五、六羽も一列に並んで、遊びながら舗装道路の上をゆつくりと横切っていて、一向にどいてくれないからだった。そして玉蜀黍<sup>とうもろこし</sup>もユーカリも、誰に気兼ねすることもないという感じで、存分に透明な風に揺られていた。

舗装道路は、亀裂はあったが、極めて快適で、

「この分だと、いくらなんでも、三時間はかかりそうにないですね」

と茜は小木曾に日本語で言っただけだった。会話はごく自然に二手に別れ、スール・パスカリーヌとフレール・ヨセフは、運転しながらも大声で喋るフレール・ミシエルとフランス語のお喋りを楽しんでいた。茜も心おきなく、前の座席にいる小木曾と話することができた。



しかし間もなく舗装は尽き、長閑な村の景色も、よく見ると放置されている面が目立つようになった。村の学校には、窓のガラスが半分くらいしか入っていないかったし、バルコンに凝った手摺をつけた、昔は立派だったろうと思われる家のウロコ型の屋根瓦は半分落ちてしまっていたりしていた。

途中で小さな湖のように見えている所があつて、茜が、

「フレール・ミシエル、これはなんといい湖ですか？」

と尋ねると、フレール・ミシエルは、

「湖じゃないんだよ。大雨の時、川が氾濫したのを、誰も直さないから、溜り水が引かないだけなんだよ」

と説明してくれた。

しかしその自然の荒廃を全く受けていないものもあつた。それは、次第に多くなってきたコスモスであつた。種の発芽率が悪いのか、若芽が枯れても苗の補給をしないからなのか、禿のように見える畑の惨めさと対照的に、道端のコスモスは人の身丈よりも高く、日本のコスモスの倍以上もありそうなたくましい花を、濃い青空を背景に揺らしていた。

「しかし、ほんとにみごとにコスモスだな。麻薬的な大きさと華やかさですね」

小木曾までが感嘆したように言つた。

「ほんとうにね。種の改良をしたわけでもないし、肥料をやっているわけでもないのに、このピンクの色の濃さったらありませんわね。どなただったかが、マダガスカルのコスモスには、ほんとうにコスモス（宇宙）を感じるね、っておっしゃった方がありましたわ」

しかし道のほうは決していい状態ではなかった。

車はやがて、時々はごろごろ石の不規則な階段をのぼるような軽業を演じるようになった。雨季のせいで道がそのまま水道（みづみち）になってしまったところでは、雨水が走ったあとに、優に階段の段差以上もある